

# カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における 使役表現と構造

鈴木 博之

## 丹巴県のカムチベット語

カムチベット語は、チベット系諸言語（Tibetic languages; Tournadre 2014 参照）の分布地域の東部を占める地域で話される言語で、下位方言区分が多岐にわたり、方言差異の大きい言語として知られる<sup>1</sup>。その方言の多様性は、川西走廊諸語と呼ばれる非チベット語の分布地域<sup>2</sup>と重なる部分もあって、複雑な様相を呈している。

四川省甘孜 [dKar-mdzes]<sup>3</sup> 藏族自治州東部の丹巴 [Rong-brag]<sup>4</sup> 県は、チベットの伝統的地域区分では「ギャロン [rGyal-rong]」に含まれる地域で、ツァンラギャロン語<sup>5</sup>、ゲシツァ語、カムチベット語、アムドチベット語、そして漢語（西南官話四川方言の土地の変種）が話される。このうち本稿で扱うカムチベット語は県南東部で話され、またカムチベット語の中で独立した下位区分を形成する方言である（Suzuki 2008, 2009: 17）。当地では「二十四村<sup>6</sup>話（二十四村方言）」という名称で通っている。徐君（2001）によると、章谷 [Rong-brag] 鎮、中路 [sPro-snang] 郷、水子 [Rwa-tso] 郷、岳扎 [Yo-brag] 郷、梭坡 [Sog-pho] 郷、格宗 [dGu-rdzong] 郷などで話されており、話者数は 30000 人弱である。二十四村方言は大渡河 [rGyal-mo rNgul-chu] を基準として東西の下位方言に分けられる<sup>7</sup>としてきた（Suzuki 2009）が、最近の調査で丹巴県に南接する康定市内で大渡河流域の孔玉郷、三合郷、金湯郷に分布するカムチベット語も同一の方言群に属すると考えてよいことが判明した<sup>8</sup>。このカムチベット語分布地域は、言語分布の観点から見て、東側にツァンラギャロン語、北側及び西側にゲシツァ語、南側にグイチャン語<sup>9</sup>それぞれの分

<sup>1</sup> カムチベット語の方言分類の全体像は、Suzuki (2009: 17) が川西民族走廊（四川省および雲南省）の範囲内の見解を提示している。ただし、その後数々の修正を加えている。丹巴県の方言についての見解もまた、新たに調査した方言を含め、再検討する必要があるが、これについては別稿にゆずる。

<sup>2</sup> 分布地域の詳細は Roche & Suzuki (2017) を参照。

<sup>3</sup> チベットの地名など固有名詞で語源が分かっているものには、[] 内にチベット文語形式（藏文）を添える。

<sup>4</sup> 正式名称は *Rong-mi Brag-go* である。

<sup>5</sup> かつては四土ギャロン語にまとめられていたが、Gates (2014) が四土ギャロン語とは異なる言語区分を提案した。

<sup>6</sup> この名称は、明清時代に行われた土司制度の行政区分で 24 か村で通用していたということに基づいて名づけられたという。

<sup>7</sup> 二十四村方言のうち、筆者は章谷鎮、中路郷、梭坡郷、格宗郷、岳扎郷の各方言を調査した。各方言の対照研究に鈴木 (2007, 2015) がある。岳扎郷の方言は 2016 年に調査したため、未公開のままである。

<sup>8</sup> これらの郷の方言は、孔玉郷莫玉村の方言が格宗郷の方言と同一の下位方言群（大渡河西岸群）に属するほかは、独立した下位方言群を形成するものと考えられる。付録 1 の 2 枚の地図を参照。

<sup>9</sup> これまで漢語名に従い「グイチョン」と書いてきた。ところが同言語の母語話者による自称の実際の発音が [ʔgwi tɕʰaŋ] や [ʔgo tɕʰaŋ] であることを実際に確かめ、また nGochang や Gochang と表記する事例 (Roche & Suzuki 2017, 2018; Roche & Yudru Tsomu 2018) も出てきたことから、表記を改めた。この名称は藏文 *Go-thang*（漢語では「魚通」）と対応する。

布地域と接しており、チベット系諸言語に属する方言群として、孤立した言語島を形成している。

本稿で扱う言語資料<sup>10</sup>は梭坡郷で話される Sogpho 方言<sup>11</sup>で、漢語の質問文を口頭で翻訳した形式と自然発話に現れる形式の2種類である。音表記は付録2の音体系で記述するものによる。

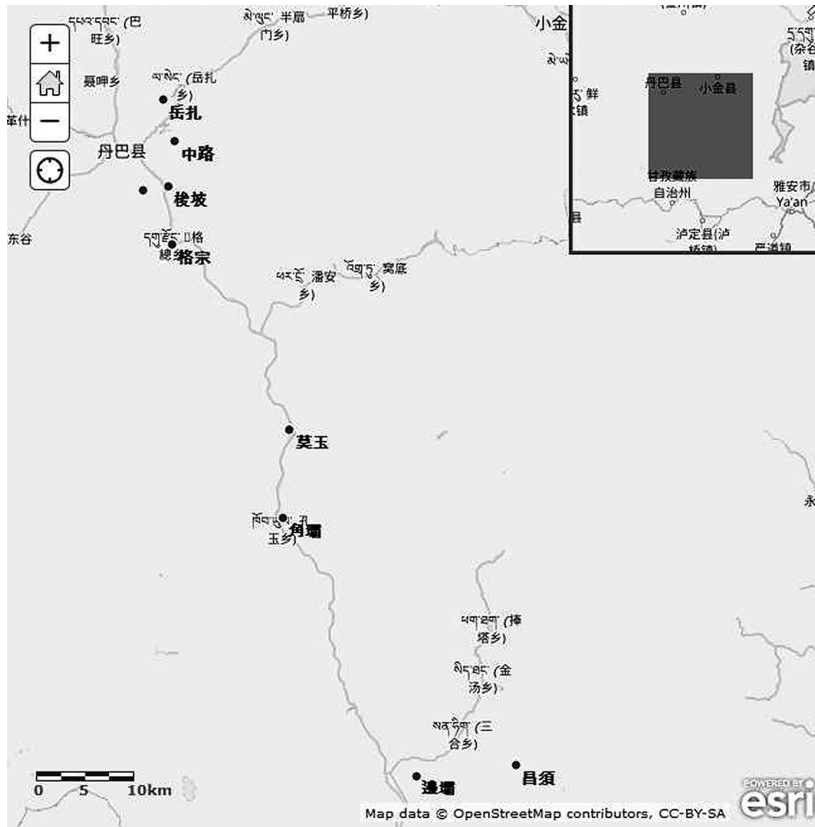
語順は動詞（句）が文末にくるのを基本とする。実際の発話によってはそうでない場合も見受けられる。また、名詞句内の修飾構造は修飾語が被修飾語に後置されるのを基本とするが、特定の接辞を用いて前置される場合も認められる（鈴木 2013, 2016）。



地図 1 中国西南部における梭坡郷の位置  
<http://ktgis.net/gcode/index.php> の Geocoding を用いて作成

<sup>10</sup> 筆者の調査協力者は肖松英さん（女性）で、梭坡郷莫洛 [Bo-lo] 村の出身である。

<sup>11</sup> 梭坡郷はさらにいくつかの村落から構成されている。詳しくは Tenzin Jinba (2013) を参照。Sogpho 方言における村落間の差異は少ないながらも認められるため、mBolo 方言と呼ぶほうがよいかもしれない。



地図2 カムチベット語丹巴方言群の分布

ArcGIS online (<https://www.arcgis.com/home/webmap/viewer.html>) を用いて作成

## 1. 使役表現の種類と概要

使役の構成の定義を Aikhenvald (2015: 143–144) に基づいて理解するならば、項を増やす操作のうち、基底の自動詞節を他動詞節に変え、自動詞節の単独項 (S) を目的語としたうえで、新たに行為者 (A; 使役者) を増やす事例と、基底の他動詞節にさらに新たに行為者 (A; 使役者) を増やし、基底の他動詞節の行為者 (A) を直接目的語 (O) とするものに分かれる。チベット系諸言語では、動詞の自他による分類はうまく機能しない (Tournadre & Suzuki forthcoming) ため、この定義をそのままあてはめることはできないが、主動詞が1項動詞か多項動詞か<sup>12</sup> という点が上記の定義の自動詞、他動詞にそれぞれ相当するものとして理解できる。

<sup>12</sup> 多項動詞は、その格支配によってさらに分類できる。また、制御可能性 (controllability) によって分類することもでき、Sogpho 方言では能格標示ができるか否かがかわってくるものの、それぞれの動詞語幹に備わっている特徴であるというよりは、派生の手続きによって変更可能な1つの特徴と見るほうが現実的である。

Sogpho 方言の使役文は、筆者が記録した限り、使役を表す動詞接尾辞 /-se/ もしくは動詞 /-<sup>h</sup>tɕu?/<sup>13</sup> を主動詞に後続させることによって成立する、接辞付加タイプの形成法が最もよく観察される。

主動詞が 1 項動詞か多項動詞かによって、被使役者の格標示が若干異なる<sup>14</sup>。格構造の概要は以下のようである。

### 1. 1 項動詞

(a) 非使役文：[行為者]-[絶] [主動詞]

(b) 使役文：[使役者]-[能] [被使役者]-[絶 / 与] [主動詞]-se/-<sup>h</sup>tɕu? (-[TAM])

### 2. 多項動詞

(a) 非使役文：[行為者]-[能] [被動者]-[絶] [主動詞]

(b) 使役文：[使役者]-[能] [被使役者]-[与] [被動者]-[絶] [主動詞]-se/-<sup>h</sup>tɕu? (-[TAM])

1 項動詞の場合、被使役者が絶対格による標示の場合と与格による標示の場合があるが、この差異による意味上の異なりは認められない。

使役の意味を担う形態素に /-se/ と /-<sup>h</sup>tɕu?/ の 2 つがあるが、これらの意味上の異なりは、前者が強制性を含意した使役、後者が放任を意図した使役と言える。ただしこの意味区分がはっきりしない例もある。次節で詳しく記述する。後者はチベット文語の bcug 「させる」と同源であるが、前者の形態素は文語に同源形式を見出すことができない<sup>15</sup>。

否定文について、否定辞と /-se/ は共起しない。「～させない」のような使役の行為を否定する場合、否定辞は /-<sup>h</sup>tɕu?/ の直前に付加され、/<sup>h</sup>mə-<sup>h</sup>tɕu?/ または /<sup>h</sup>ma-<sup>h</sup>tɕu?/ となり、声調領域が主動詞と切り離され、独立した声調パターンを担う。「～しないようにさせる」という場合は主動詞の直前に /<sup>h</sup>mə-/ 否定辞が付加される。

一方で、方向接辞は常に主動詞に接頭辞として付加され、TAM 標識群は常に使役動詞に後続する。

なお、使役文を構成できる動詞には制限があり、述語動詞 (/jī, ʒī ŋō/ 「である」、/jo?/ 「存在する」)、感情動詞 (/<sup>h</sup>gwo/ 「愛する」、/<sup>h</sup>ta?/ 「怖い」)、知覚動詞 (/<sup>p</sup>tɕe:/ 「空腹である」) などは通常使役構文にならない。これは形態統語論上の問題ではなく、語用論的な問題ではないかと考えられる。作例ではこれらの一部の動詞が使役接辞をとる例が容認されるが、日常的に用いるかどうかは別の問題である。

<sup>13</sup> 肯定文の場合にはこの動詞語幹は声調を担わず先行する動詞と同じ声調の範囲に入るが、否定文の場合には否定辞がこれに付加され、独立の声調を担う。

<sup>14</sup> Sogpho 方言の格体系に関しては、鈴木 (2010) を参照。

<sup>15</sup> Sogpho 方言では、初頭子音が無声無気阻害音の場合、同音節が語中に置かれる場合、その子音が有声化するという形態音韻論的交替が認められる。たとえば、/so/ 「食べる」-/<sup>h</sup>mə-zo/ 「食べない」のようである。使役の接尾辞 /-se/ を見てみると、いかなる場合においてもこの音交替が起こらない。この点は、この形態素の来源を考えるうえで重要となるだろう。

以上に述べた接尾辞以外に、/ʎeʔ/「する」と/ʎzu/「作る」も意味上使役文の一種としてとらえることができる構文がある。前者についてはチベット文語に認められる現象と近似する（星 2016: 159–160）。

また、語幹の形式の交替を伴う語彙形式の「自他対応」がチベット系諸言語には認められる<sup>16</sup>が、Sogpho 方言において、明確なペアを構成する例は少ない。チベット・ビルマ系諸言語において使役は動詞語幹の接頭辞 s- が示すことから、これを初頭子音に含む形式の対応形、すなわち前気音を伴う形式が派生の手続きとして使役の形態を引き継いでいるものとする<sup>17</sup>。

## 2. 使役文の形成

ここでは、非使役文と使役文の構造を具体例を挙げつつ説明する。すなわち、非使役文と使役文を対比させながら、使役文を作る具体的な手続きを示す。

先述のように、1項動詞と多項動詞では使役文の作り方に若干の異なりがあるため、分けて説明する。まず、1項動詞 /ʎgo:/「笑う」を例に、非使役文(1)と使役文(2)を掲げる。「笑う」は制御可能動詞に数えられるため、行為者が絶対格におかれる場合(1a)と能格におかれる場合(1b)がある。

(1) a ʎti:-ø ʎgo:  
3-ABS 笑う  
彼は（よく）笑うでしょう。

b ʎtə ʎə ʎgo:-ze  
3.ERG 笑う -AOR  
彼は笑いました。

(1a)は習慣的な動作を描写した発話ととらえられる。(1b)は1回の動作が終了したことを描写した発話ととらえられる。

(1a)を使役文にする場合、被使役者は絶対格か与格かを選択できる(2a)が、(1b)の場合、被使役者は与格になるほうが好まれるようである(2b)。

(2) a ʎjeʔ {ʎti:-ø/ʎtə-lə} ʎgo:-hʎtɕuʔ  
1.ERG {3-ABS/3-DAT} 笑う -CAUS  
私は彼を笑わせます。

<sup>16</sup> Tournadre & Sangda Dorje (2003), 張濟川 (2009: 210–218), 星 (2016: 94–96) など参照。

<sup>17</sup> Sogpho 方言の形式と蔵文との対応関係については、Suzuki (2011), 鈴木 (2015) を参照。



b ʼŋeʔ ʼtə-lə ʰgo:-hʰtɕuʔ-ze  
1.ERG 3-DAT 笑う -CAUS-AOR

私は彼を笑わせました。

次に、2 項動詞 /so/ 「食べる」を例に、非使役文 (3) と使役文 (4) を掲げる。

(3) ʼtə ɣə ʼse-ø ʼje-zo-ze  
3.ERG ごはん -ABS DIR- 食べる -AOR

彼はごはんを食べました。

(4) a ʼŋeʔ ʼtə-lə ʼse-ø ʼje-zo-se-ze  
1.ERG 3-DAT ごはん -ABS DIR- 食べる -CAUS-AOR

私は彼にごはんを食べさせました。

b ʼŋeʔ ʼtə-lə ʼse-ø ʼje-zo-hʰtɕuʔ-ze  
1.ERG 3-DAT ごはん -ABS DIR- 食べる -CAUS-AOR

私は彼にごはんを食べさせました。

(4ab)における「食べさせる」は、ともに使役者が被使役者の口に食べ物を運んでいく行為と、被使役者自身が食べ物を取って口に運ぶ行為の2種類の意味がある。(4a)と(4b)の異なりは、(4a)には使役者(ここでは「私」)に強制的に食べさせる意図があるということ、(4b)には使役者が被使役者に強制性を伴わない、すなわち「食べさせたいが食べても食べなくても関係ない」という含意があるか、または被使役者が自発的に行っている行為をそのまま容認(放任)しておくという意図があること、という違いがある。(4)の場合はこの異なりが比較的明確に現れている例である。

使役文の否定は次のようである。

(5) a ʼŋeʔ ʰtɕʰaʔ lə ʰduʔ ʼmə-hʰtɕuʔ  
1.ERG 2.DAT 座る NEG-CAUS

私は彼を座らせません。

b ʼŋeʔ ʰtɕʰaʔ lə ʰduʔ ʼma-hʰtɕuʔ  
1.ERG 2.DAT 座る NEG-CAUS

私は彼を座らせませんでした。

以上に示した使役文の形成に加えて、いくつかの動詞・形容詞に /jeʔ/ 「する」か /ʰzu/ 「作る」を付加して使役文を形成するパターンが認められる。

- (6) a  $\text{ʰdza } \text{h}x\tilde{a} \text{ } \text{t}^{\text{h}}\text{a}?\text{-}\emptyset \quad \text{ʔe}?\text{-lo}$   
靴ひも -ABS                      ほどける -STA  
靴ひもがほどけています。 / ほどけました。
- b  $\text{ʔe}?\quad \text{ʰdza } \text{h}x\tilde{a} \text{ } \text{t}^{\text{h}}\text{a}?\text{-}\emptyset \quad \text{ʔe}?\text{-je}?\text{-ze}$   
1.ERG   靴ひも -ABS                      ほどける -する -AOR  
私は靴ひもをほどきました。
- c  $\text{ʔe}?\quad \text{t}\text{-l}\text{-l}\text{-}\text{ə} \quad \text{ʰdza } \text{h}x\tilde{a} \text{ } \text{t}^{\text{h}}\text{a}?\text{-}\emptyset \quad \text{p}^{\text{h}}\text{a-}\text{ʔe}?\text{-se-ze}$   
1.ERG   3-DAT   靴ひも -ABS                      DIR- ほどける -CAUS-AOR  
私は彼に靴ひもをほどかせました。

(6a) は靴ひもが話者の気づかないうちに自然とほどけた場合の描写, (6b) は行為者が靴ひもをほどく場合の描写, (6c) は使役者が被使役者に靴ひもをほどかせる場合の描写である<sup>18</sup>。(6c) は先に見た使役文の形成法に沿っているが, (6b) の形式は特定の動詞, 特に「自然と～になる」という状態変化を表す動詞語幹とともに用いられる形式である。現段階では /ʔe?/ 「する」 を使役を表す動詞とは考えていないが, 語用論的に使役の意味を担っている。

(7) は形容詞が述部にくる例である。

- (7)  $\text{ } \text{n}\text{-}\text{ə} \quad \text{t}\text{-}\text{t}\text{-}\text{a}:\text{ } \text{p}\text{-}\text{n}\text{-}\text{ə} \text{-}\emptyset \quad \text{t}\text{-}\text{t}\text{-}\text{e}^{\text{h}}\text{e}?\quad \text{ } \text{h}^{\text{h}}\text{ka } \text{h}^{\text{h}}\text{po} \quad \text{p}^{\text{h}}\text{a-}\text{ʰ}\text{zu-}\text{h}^{\text{h}}\text{t}\text{-}\text{t}\text{-}\text{t}\text{-}\text{u}?$   
この   もの -DEF-ABS                      2.ERG   白い                      DIR- 作る -CAUS  
この物をあなたは白にしなさい。 / 変えなさい。

形容詞述語の場合, 語幹は状態を表すのみであるが, 動詞 /ʰzu/ 「作る」を用いると状態変化を表すことができる。ただし, この動詞は「作る」という意味ではなく, 「なる」という意味で解釈する必要がある。このとき, 例文(7)のように, 使役を表す動詞をさらに加えると「～の状態にする」という意味が生まれる。しかし, (8)のように, 形容詞語幹に直接 /-h<sup>h</sup>t<sup>h</sup>u?/ がつく例もある。

- (8)  $\text{ } \text{ʔe}?\quad \text{t}\text{-l}\text{-l}\text{-}\text{ə} \quad \text{ } \text{n}\text{-}\text{i} \text{ mo } \text{s}^{\text{h}}\text{u}?\text{-}\text{n}\text{-}\text{ə} \quad \text{ } \text{n}\tilde{\text{a}}?\text{-}\text{h}^{\text{h}}\text{t}\text{-}\text{t}\text{-}\text{u}?$   
1.ERG   3-DAT   日光浴する -CONJ   黒い -CAUS  
私は彼に日焼けにすることで黒くさせます。

<sup>18</sup> (6c) の発話には, 動詞語幹に方向接辞 /p<sup>h</sup>a-/ が付加されている。これは主に命令文で現れる要素で, 行為を強制させる意図が現れているものとする。使役接辞 /-se-/ との共起は自然であるが, (7) のように /-h<sup>h</sup>t<sup>h</sup>u?/ と共起する場合もある。

### 3. 具体例

ここでは、接尾辞による使役構文と動詞語幹の交替に基づく使役文の具体例を掲げる。

#### 3.1. 接尾辞を用いる例

以下に /-<sup>h</sup>tɕuʔ/ や /-se/ を用いるものについて例文を掲げる。

/-<sup>h</sup>tɕuʔ/ を用いるものは、基本的に放任「させておく」の含意があると考えられる。

(9) ʼŋə-{} /lə} ʼje-<sup>ŋ</sup>go-<sup>h</sup>tɕuʔ

1-{ABS/DAT} DIR-行く -CAUS

私を行かせなさい。

(10) ʼŋeʔ ʼtə-lə ʼne: ʼts<sup>h</sup>e-fiō-<sup>h</sup>tɕuʔ-<sup>fi</sup>gø:

1.ERG 3-DAT ここ DIR-来る -CAUS-IFUT

私は彼をここへ来させるつもりです。

(11) ʼnə ʼts<sup>h</sup>e:-ø ʼŋeʔ ʼtɕ<sup>h</sup>uʔ-lə ʼso-<sup>h</sup>tɕuʔ

この おかず -ABS 1.ERG 2-DAT 食べる -CAUS

このおかずは私があなたに食べさせます。

(12)の主動詞「吐く」は制御不可能動詞である。この行為を使役者が強制することはできないため、この発話は被動作主がすでに吐いているところをそのまま放っておくといったような状況が想像できる。

(12) ʼŋeʔ ʼtə-lə ʼ<sup>h</sup>tɕuʔ-<sup>h</sup>tɕuʔ

1.ERG 3-DAT 吐く -CAUS

私は彼に吐かせます。/吐かせてやります。

(13)の主動詞「死ぬ」も、(12)の例と同じく制御不可能動詞である。この発話は、死にかけている被動作主をそのまま放っておき、結果的に死なせたという状況が想像できる。

(13) ʼŋeʔ ʼ<sup>h</sup>to-lə ʼ<sup>g</sup>hə-<sup>h</sup>tɕuʔ-ze

1.ERG 馬 -DAT 死ぬ -CAUS-AOR

私は馬を死なせました。



/-se/ を用いるものは、基本的に命令・依頼による行為の強制性が含意される。しかし、強制力が必ずしも強いわけではない。

- (14) ʔtʰeʔ ʔŋə-lə ʔse-ø ʔba je-se  
2.ERG 1-DAT ご飯 -ABS 準備する -CAUS

あなたは私にごはんを作らせます。

- (15) ʔge ʔgā-gə ʔjā tʰi-lə ʔkə-ø ʔzə-se-ze-ʔrəʔ  
先生 -ERG PSN-DAT 歌 -ABS する -CAUS-AOR-[判断]

先生はヤンジンに歌を歌わせました。

- (16) ʔnə-ø ʔtʰu-nə-ø-də ʔtʰeʔ ʔŋə-lə ʔkʰu:ʂʰo:-ŋwo ʔjī ŋō  
これ -ABS 水-[定]-ABS-[主] 2.ERG 1-DAT 汲む-来る -NML CPV

この水は、あなたが私に汲んで来させたのです。

(17) のような複文の例では、最初の使役文の内容を続く第2文が否定している。強制性はあっても、結果は強制されていないことを示している。

- (17) ʔŋeʔ ʔtʰaʔlə ʔse-ø ʔba jeʔ-se-ze  
1.ERG 2.DAT ごはん -ABS 準備する -CAUS-AOR  
ʔtʰaʔ-ø ʔma-jeʔ-zə  
2-ABS NEG-する -RSL

私はあなたにごはんを準備させようとしたのですが、あなたはしませんでした。

この場合、第1文は「準備させた」ではなく、「準備させようとした」と解さなければ意味が通らなくなる。

(18) の主動詞「死ぬ」は制御不可能動詞である。この発話は漢語からの翻訳であるが、漢語原文は「自殺する」という動詞を当てていたが、それを以下のように訳している。この使役は「自殺を強要する/死ぬと命じる」という意味として理解できる。

- (18) ʔtə-γə ʔŋə-lə ʔpʰa-ʂʰə-se  
3-ERG 1-DAT DIR-死ぬ -CAUS

彼は私に自殺を強要しました。

(18) において /-se/ が用いられているのは、被使役者が自殺を望んでいるわけではないことを含意している。もし /-ʰtʰeʔ/ を用いれば、被使役者は自殺を望ん

でいて、使役者は単にその行為を容認したということになる。

使役接辞が連続する例も認められるが、記録した限りでは(19)のみである。

- (19) ʻŋeʔ ʻtə-lə ʻxwa [wā-nə ʻndze:-hʔtʃuʔ-se-ze  
 1.ERG 3-DAT 化粧する -CONJ 美しい -CAUS-CAUS-AOR

私は彼女を化粧することで美しくさせました。

形態論的には形容詞述語「美しい」を変化動詞「美しくする」にし、さらに使役の意味「美しくさせる」にするという手続きであると分析する。

### 3.2. 動詞語幹の交替

動詞語幹の交替には、語幹それ自体が項の増減で関連のあるものと、そうでないものに分かれる。いずれも例は少ない。

/ʔ<sup>h</sup>ke:/ 「(湯が) 沸く」 -/ʔ<sup>h</sup>ke:/ 「(湯を) 沸かす」

- (20) a ʔ<sup>h</sup>ke:-ø ʔ<sup>h</sup>ke:-lo  
 水 -ABS 沸く -STA

水が沸騰しました / 湯が沸きました。

- b ʻŋeʔ ʔ<sup>h</sup>ke:-ø ʔ<sup>h</sup>ke:-ŋgo:  
 1.ERG 湯 -ABS 沸かす -IFUT

私は水を沸かしたいです。

- c ʻŋeʔ ʔ<sup>h</sup>ke:-lo ʔ<sup>h</sup>ke:-se-ze  
 1.ERG 3-DAT 湯 -ABS 沸かす -CAUS-AOR

私は彼に水を沸かさせました。

/ʔ<sup>h</sup>tsu:/ 「(米が) 炊ける」 -/ʔ<sup>h</sup>tsu:/ 「(米を) 炊く」

- (21) a ʔ<sup>h</sup>tsu:-ø ʔ<sup>h</sup>tsu:-lo  
 米 -ABS 炊ける -STA

米が炊けました。

- b ʻŋeʔ ʔ<sup>h</sup>tsu:-ø ʔ<sup>h</sup>tsu:-tho:-ze  
 1.ERG 米 -ABS 炊く -ACH-AOR

私は米を炊き上げてあります。

/<sup>n</sup>go-<sup>s</sup>hō/ 「行く<sup>19</sup>」 - /<sup>h</sup>tō/ 「行かせる<sup>20</sup>」

(22) a ʼŋo-∅ ʼs<sup>h</sup>ō-ze  
1-ABS 行く -AOR

私は行きました。

b ʼŋeʔ ʼti:-∅ <sup>h</sup>tō-ze  
1.ERG 3-ABS 行く -AOR

私は彼を行かせました。

(22) は使役・非使役で形態的なペアを構成しているのではなく、意味的なペアであるといえる<sup>21</sup>。(22b) には、「命令によって彼を行かせる」場合と、「行きたがっている彼を行かせる」の2通りの意味がある。

## Sogpho 方言の音体系

概要を以下に示す。詳細は鈴木（2005）を参照。

### 声調

声調は語単位でかかる。

ˉ : 高平      ˊ : 上昇      ˆ : 上昇下降  
ˉˊ : 低平      ˋ : 下降

### 母音

以下の各母音につき、長 / 短, 鼻母音 / 非鼻母音の対立がある。

ɿ	i		ʊ	u
	e	ə	ə	o
	ɛ			ɔ
	a			ɑ

<sup>19</sup> /<sup>n</sup>go/ は非完了の形態で、/<sup>s</sup>hō/ は完了および命令の形態である。

<sup>20</sup> /<sup>h</sup>tō/ の原義は「送る、派遣する」である。チベット文語では使役の動詞として「～しに行かせる」の意味で用いられる（星 2016: 158–159）。

<sup>21</sup> 茶堡ギャロン語では、「行く」の語幹に使役接頭辞を付加することで「送る」の意味になる（Jacques 2015: 168）。

## 子音

子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧を示す。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	t̪ <sup>h</sup>	c <sup>h</sup>	k <sup>h</sup>	
	無気	p	t	t̪	c	k	ʔ
	有声	b	d	d̪	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>		tɕ <sup>h</sup>		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʒ		
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>	ʃ <sup>h</sup>	ç <sup>h</sup>	x <sup>h</sup>	
	無気	φ	s	ʃ	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʝ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɳ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

子音連続のパターンとして、主だったものに前鼻音、前気音、初頭両唇閉鎖音などがある。

## 略号

1	1 人称	DIR	方向接辞
2	2 人称	ERG	能格
3	3 人称	EXV	存在動詞
ABS	絶対格	GEN	属格
ACH	達成	IFUT	意思未来
AOR	過去	NEG	否定辞
CAUS	使役	NML	名詞化標識
CONJ	接続語	PSN	人名
CPV	判断動詞	QTF	量詞
DAT	与格	RSL	結果
DEF	定標識	TOP	主題標識

複数の略号が1つの語形に重なるときには、. で区切って示す（たとえば 1.ERG など）。

## 参考文献

- 鈴木博之 (2005) 「チベット語丹巴・梭坡 [Sogpho] 方言の音声分析」『ニダバ』第 34 号, 96–104.
- (2007) 「カムチベット語方言の多様性から見る丹巴県チベット語の方言特徴」『人文知の新たな総合に向けて』第 5 回報告書下巻, 231–249.
- (2010) 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）の格体系」澤田英夫編『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』, 95–108, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- (2013) 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における文の下位分類」澤田英夫編『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』, 139–150, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- (2015) 〈丹巴藏語在藏語康方言中的歷史地位〉(向洵 [譯], 意西微薩・阿錯 [校])《東方藏區諸語言研究》, 138–162, 四川民族出版社. (原版: *Historical position of Danba Tibetan among Khams Tibetan dialects*, paper presented at the Workshop on Tibeto-Burman Languages of Sichuan (Taipei), 2008 [in *Pre-workshop Proceedings*, 419–439])
- (2016) 「カムチベット語梭坡 [Sogpho] 方言（丹巴県）における名詞句の構造」池田巧編『シナ＝チベット系諸言語の文法現象 1：名詞句の構造』, 15–25, 京都大学人文科学研究所.
- 星泉 (2016) 『古典チベット語文法：『王統明鏡史』（14 世紀）に基づいて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Aikhenvald, Alexandra Y. (2015) *The Art of Grammar: A Practical Guide*. Oxford: Oxford University Press.
- Gates, Jesse P. (2014) *Situ in situ: Towards a dialectology of Jiāróng (rGyalrong)*. München: Lincom Europa.
- Jacques, Guillaume (2015) The origin of the causative prefix in Rgyalrong languages and its implication for proto-Sino-Tibetan reconstruction. *Folia Linguistica Historica* 36: 165–198. [doi: 10.1515/flih-2015-0002]
- Roche, Gerald & Hiroyuki Suzuki (2017) Mapping the linguistic minorities of the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics VI—Means to Count Nouns—*, 26–40.  
Online: [https://publication.aa-ken.jp/sag6\\_count\\_2017.pdf](https://publication.aa-ken.jp/sag6_count_2017.pdf)
- (2018) Tibet's minority languages: Diversity and endangerment. *Modern Asian Studies*, 52(4): 1227–1278. [doi: 10.1017/S0026749X1600072X]
- Roche, Gerald & Yudru Tsomu (2018) Tibet's invisible languages and China's language endangerment crisis: Lessons from the Gochang language, Western Sichuan. *China Quarterly*, 233: 186–210. [doi: 10.1017/S0305741018000012]
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography—a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan—, in: Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet—New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report Vol. 3*, 15–34, Suita: National Museum of Ethnology.
- (2011) Dialectal particularities of Sogpho Tibetan—An introduction to the “Twenty-four villages’ patois”—. In Mark Turin & Bettina Zeisler (eds.) *Himalayan Languages and Linguistics: Studies in Phonology, Semantics, Morphology and Syntax*, 55–73, Leiden: Brill.
- Tenzin Jinba (2013) *In the land of the eastern Queendom: The politics of gender and ethnicity on the Sino-Tibetan border*. Seattle: University of Washington Press.
- Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105–129. Berlin: Walter de Gruyter.
- Tournadre, Nicolas & Sangda Dorje (2003) *Manuel de tibétain standard : langue et civilisation*, 2<sup>ème</sup> édition. Paris: L’asiathèque
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelles for the cartography).
- 徐君 (2001) 〈梭坡藏族田野考察報告〉郎維偉, 艾建主編《大渡河上游丹巴藏族民間文化考察報告》, 27–59, 成都: 四川省民族研究所.
- 張濟川 (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》北京: 社會科學文獻出版社.

## 付記

筆者による Sogpho 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 16–20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦, 課題番号 16102001)
- 平成 19–21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21–23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦, 課題番号 21251007)
- 平成 25–28 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) 「言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究」(研究代表者：鈴木博之, 課題番号 25770167)
- 平成 28–29 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦, 課題番号 16H02722)
- 平成 29 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A) 「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」(研究代表者：鈴木博之, 課題番号 17H04774)